「マイスター・フランケ」作《聖トマス祭壇画》後ろ姿のキリスト復活像に関する考察

奥村あゆ（京都大学）

本発表の目的は、通称「マイスター・フランケ」作《聖トマス祭壇画》(1426-1430 年頃、ハンブルク美術館所蔵)の右翼上段に描かれた〈キリストの復活〉の図像解釈である。本祭壇画の復活のキリストは後ろ姿で描かれているが、これはキリスト教図像学において稀有な作例であるにもかかわらず、その積極的な解釈は未だ行われていない。

B・マルテンスなどの先行研究は、その縁に手を添えて棺を跨ぎ、鑑賞者に背中を見せて外に出ようとするなどの一見したところ「人間らしい」イエスの姿から、本作を中世後期の写実主義の萌芽と位置付けた。他方、イエスの復活は西方教会において「イエスによる人類の原罪の贖い」「贖いの完了による肉体を伴ったイエスの蘇り」「復活後の冥府降下による穢れない魂の救済」そして「来る最後の日のすべての死者の肉体を伴う蘇り」「最後の審判を経た浄められた魂の天国への導き」という、キリスト教教義の根幹をなす意義を担っていたことに加えて、西方教会はイエス・キリストが人性と神性の両方を常に有するという両性説を正統教義として守ってきた。従って、本作を写実主義から理解する解釈はイエスの人性に偏重しているともとれるため、図像学史上特異な図像を示す本作はさらなる考察の余地がある。

そこで本発表ではまず、類例との比較などを通じ、血の滴る右手の聖痕と同時に鞭打ちの傷が癒えた背中を見せるイエスを描いた本作の第一の意図は、復活したイエスに人性と神性の両性が宿るという教義の明示であることを明らかにする。次に、祭壇画全体構成ならびに中世美術における後ろ姿の人物像の機能を検討し、本作が祭壇画の外に鑑賞者の注意を促すことを指摘する。その上で、本作における復活のイエスの身体が持つ左下への方向性に着目し、その姿がイエスの冥府降下を暗示することを明らかにする。冥府降下は神学上では一般にイエスの十字架上での死と復活との間に起こったとされる。しかし、14、15 世紀のイエスの復活を含む聖史劇では、イエスが棺から復活した後に冥府降下場面が続く例も多く、本作が制作された 15 世紀初頭にはイエスが復活の後に冥府へ下ったとする理解が一方では生じていたことが分かる。

以上のような新しい知見のもと、中世後期の復活図像ならびにそれを含む受難物語画を検討すると、復活の後に冥府降下の配置された作例や、復活と冥府降下が合体した作例などが多く見出される。また、当時「煉獄」での贖罪をはじめとする死後のあり方への強い関心から冥府降下主題の重要性が高まっていた。これらの図像解釈と時代背景との照合を経て、《聖トマス祭壇画》の〈キリストの復活〉は、復活し、両性を伴って冥府へと降下しようとするイエスの姿をあらわしており、そのことによってイエスの復活が担う重層的な意味のすべてを一見して鑑賞者に看取たらしめる高度な操作のなされた表現であったと結論付ける。